

学 位 論 文 審 査 要 旨 公開審査日 2017 年 4 月 26 日(水)

| | | |
|--|-------|----------|
| 報告番号：甲・乙 第 | 号 | 氏名：大村 涼子 |
| 論文審査 担当者 | 主査 教授 | 副査 教授 印 |
| | | 副査 教授 印 |
| <p>審査論文の題目： Feasibility of the Secondary debulking surgery for recurrent ovarian cancer (再発卵巣癌に対する SDS の可能性に関する検討)</p> <p>著 者： Ryoko Omura, Fumitoshi Terauchi, Yasukazu Sagawa, Keiichi Isaka</p> <p>掲載誌： The Journal of Tokyo Medical University (in press, 2017)</p> | | |
| <p>論文要旨：</p> <p>再発卵巣癌は化学療法が主たる治療法であるが、腫瘍摘出が可能な症例では secondary debulking surgery (SDS) が予後を改善する可能性があり、選択肢の一つとなってきた。過去の報告の中で、手術完遂度その中でも特に complete surgery が予後と相関するという報告は多いが、完全摘出可能だった症例が全て長期生存を望めるわけではない。本研究は、再発卵巣癌に対し、摘出個数や摘出臓器などを限定せず完全摘出を目指し積極的に手術を行うことで、SDS の適応について後方視的に検討した。</p> <p>2005 年 2 月～2014 年 7 月に当院で再発卵巣癌 44 症例に SDS を施行し、SDS 症例全体の再発後 Overall Survival(OS)、周術期合併症そして予後因子について検討を行った。SDS 症例全体の OS 中央値は 45 ヶ月だった。44 症例のうち 36 症例(81.8%)は完全摘出できた。Complete 群の OS は、Non-complete 群 (Optimal 群と Suboptimal 群) に比べ優位に延長した(p 値=0.027)。合併症は、6 症例に輸血を行ったが、その他重篤な合併症はなかった。再発後 OS に影響を及ぼす予後因子解析で有意差が認められたのは、DFI 6 か月以上、完全摘出、摘出個数 2 個以下であった。</p> | | |
| <p>審査過程：</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 再発卵巣癌と他の癌腫の生物学特性について質問があり、妥当な回答が行われた。 2. 化学療法に対する反応性について質問があり、妥当な回答が得られた。 3. 後方視的研究の対照群の設定に関する質問があり、妥当な回答が得られた。 4. SDS 後の合併症に関する質問があり、妥当な回答が得られた。 | | |
| <p>価値判定：</p> <p>本研究は、再発卵巣癌に対する secondary debulking surgery (SDS) の妥当性を後方視的に検討したものであり、DFI 6 か月以上、摘出個数 2 個以下を満たす症例に complete surgery を施行すれば、さらに予後改善が期待できる可能性が示された。SDS は治療の一つであり、慎重に症例を選択すれば長期生存をもたらす可能性が示唆され、学位論文としての価値を認めた。</p> | | |